聖書に親しむ

2024年 聖書週間（11月17～24日）

テーマ：初めに言（ことば）があった。（ヨハネ１・１）

2024.11.17
カトリック中央協議会

〒135-8585　東京都江東区潮見 2-10-10
TEL03-5632-4445　FAX03-5632-4465
郵便振替　00130-6-36546（宗）カトリック中央協議会一般会計口

巻 頭 言

イエスが読んだ聖書

森山　信三

今年初め、新共同訳聖書の翻訳編集員として尽力された太田道子さんが急逝されました。太田さんは大学卒業後、アメリカで聖書研究中、M・L・キング牧師と出会い、その活動に参加し、社会の底辺での労働をしながら研究を続けます。そのときから、彼女にとって聖書は机の上で読む書物であるばかりではなく、生きるものとなりました。新共同訳聖書の完成後、長年パレスチナ難民支援の活動を続けておられました。2023 年 10 月 7 日、ハマスのイスラエル奇襲とそれに続く戦争のショックもあり、容態が急変したと聞きます。道子さんと親しかった友人の司祭が彼女のことばとして送ってくれました。「聖書における『約束の地』とは、特定の土地を占有することでも地上のある地点にこだわることでもない。約束の地とは神との契約に基づく生き方のことである」と。

太田さんとの最初の出会いは、1988 年、わたしの司祭叙階の年でした。その年の夏、聖地イスラエルにて 50 人近い参加者とともに 1 か月間の聖書セミナーに参加しました。太田さんは、その講師を務められ、おもにモーセ五書、律法を講義されました。午前中はホテルで講義を受け、午後から巡礼をするといったスタイルで、このうえない恵みのひとときでした。神学校を卒業したばかりのわたしにとって、旧約は新約の準備の書にすぎない、それくらいの認識でした。聖地で聴く彼女の講義により、イエスのことば、福音を理解するためには、旧約は不可欠であること、イエスにとって「聖書」とは旧約聖書のこと、イエスは当然その聖書から神の愛を説き、その愛に生きることを教えたなど、エマオの弟子たちのように次第に目が開いていきました。そうして聖書がわたしにとって、読み、人々に説くための書物であるだけではなく、キリスト者としてどのように生きていくべきかの大切な指針のようなものとなっていきました。旧約の「律法」はヘブライ語で「トーラー」といいますが、これはいわゆる単に法律のことではありません。このことばは「投げる」を意味する語から派生したもので、人間の生き方、共同体のあり方を規定する方向指示のようなものを意味するのだと教わりました。旧約の人々は、トーラーを読み、議論し、移り変わる時代にどのように適応させるか、たえず探求し、伝承してきたのです。イエスはそのようなユダヤ社会の中にあって新たな福音の視点で、トーラーを生きておられました。太田さんの生き方はまさにそのようなイエスを彷彿とさせるものでした。わたしたちは皆「約束の地」に向かって旅をしていますが、それは何か現実にはない理想郷のようなものを追い求めることではなく、イエスとの約束に従って、日々を正義と平和と喜び（ローマ 14・17 参照）に生きることなのです。

イスラエルとハマスの政治指導者には、今一度自らの先祖の信仰の姿勢を見つめ直してほしいと願います。またわたしたちも、2000 年以上続いてきた、律法に向かうその姿勢に倣いたいと思います。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた」

東京教区名誉補佐司教　幸田　和生

「初めに言（ことば）があった」ヨハネ福音書冒頭の言葉です。福音記者は明らかに、旧約聖書の最初のページを意識しています。そこにはこうありました。

「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。『光あれ。』こうして、光があった。」（創世記１・１－３）

「光あれ」という神のことばが無から存在を呼び覚まします。神のことばとは神の働きかけそのものです。この神の働きかけは世の初めからあり、歴史の中でずっと続けられてきました。アブラハムとその子孫たちの歩みを通して、預言者たちの希望の言葉を通して、神は人類に対する救いの働きかけをし続けてくださった。そのことを証言するのが旧約聖書です。

神の人間に対する決定的な働きかけはイエスを通して行われました。生身の人間として生きたイエスにおいて、神は人間に対する愛と救いの計画をはっきりと現されたのです。そのことをヨハネ福音書は次のように表現します。

「言は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。」（ヨハネ１・14）

永遠の神のことばが弱い人間となって、わたしたちの間に住まわれた。イエスは神のみこころに従い、人々に神のいつくしみを示し、最後の最後にはすべての人の救いのために、ご自分のすべてを与え尽くされた。このイエスの生涯こそが神の人間に対する決定的な働きかけ、すなわち「ことば」だというのです。

わたしたちは聖書を大切にします。それは聖書の言葉がどれも素晴らしい教えだからというのではなく、聖書の言葉のすべてが、いつか来られるイエスを予言し、すでに来られたイエスを証言するものだからです。わたしたちが聖書を読むのは、イエスを知るためであり、イエスに従って生きるためなのです。

カトリック教会のミサや「教会の祈り」には固有の聖書朗読配分があり、日々の典礼を豊かにしています。しかし、その日に読む福音書の箇所は原則的に１つの箇所だけで、それがミサで読まれる福音の箇所です。主日には主日の、週日には週日のサイクルがあり、毎日、イエスの生涯の一つの場面、あるいはその中のことばを受け取るのです。この日々の福音の箇所を大切にして聖書を読みましょう。

現代は「ことば」を信じられなくなった時代かもしれません。特殊詐欺事件が頻発し、SNS を通してフェイクニュースは拡散し、だれの考えかもわからない AI の言葉が大量生産されています。そんな中で、人と人とのコミュニケーションが豊かになるどころか、憎悪や敵意が煽られ、暴力や戦争にまで至ってしまっている現実があります。

だからこそ、わたしたちは、いつも永遠の神の「ことば」であるイエスに立ち返り、イエスとともに歩み続けようとするのです。

みことばを深める

みことばの実感を求めて―日常の祈りを育む

ノートルダム清心女子大学キリスト教文化研究所教授　山根　道公

50年近く親しんできた聖書を開くと、「初めに言(ことば)があった」の頁の余白に「言(ロゴス)」＝「キリスト」と自筆の書込みがあります。中高生の教会学校の学びでこのヨハネ福音書の「言」は「キリスト」と置き換えて読むと良いと教えられ、それを実践することで、難解に思えたみことばが心にすっとしみ込んできた体験は今も忘れられません。その後、大学時代に東京教区の井上洋治神父に出会い、導かれるなかで、キリストが示された神（ヨハネ1・18）を実感したいと願い、聖書を懸命に学びました。

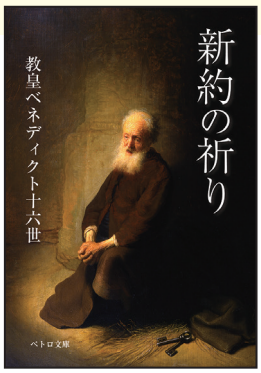
私が大学院生の時、東京教区のインカルチュレーション・オフィス担当司祭の任命を受けた井上神父は、イエスの福音を日本人の心の琴線に触れる日本語に凝結させる文化内開花(インカルチュレーション)をめざして「風の家(プネウマ)」を創設し、私もスタッフに加わりました。そこで井上神父からの聖書の学びを深め、私の聖書への書込みも増えました。その中で今の私の生を支える日常の祈りを育んだ重要な書込みの一つが、ギリシア語の「プネウマ」が日本語では「霊」と訳されているのを「風」と訳した書込みです（ヨハネ3・8は「風」と訳されています）。井上神父は、パウロがキリスト者の生き方を示す「霊の導きに従って歩みなさい」（ガラテヤ5・6）の「霊」を「風」と置き換えて、「風に己を委せきってお生きなさい」と訳して書にしたため、掲げました。さらに晩年の井上神父は、日本人の感覚では神様を呼び捨てにはしないからと、聖霊を敬いの心を込めて「おみ風さま（御神風様）」と呼びました。私も、聖霊を意味する「霊(プネウマ)」は「＝おみ風さま」と聖書に書込んでそう読むことで、大切なみことば「プネウマ」が敬いと親しみをもってより深く実感できるようになりました。

もう一つ、私の信仰を支える最も重要な書込みは、イエスの言葉で「父」と訳されているみことばを「＝アッバ」と置き換える書込みです。聖書学者エレミアスによれば、「アッバ」はイエスの母語のアラム語で、幼児が父親を親しみをこめて呼ぶ言葉で、イエスの祈りはすべて「アッバ」で始まり、弟子に授けた「主の祈り」も「父よ」（＝アッバ）で始まったと言われます（ルカ11・2）。ここに「神と共にあった」「肉となって、わたしたちの間に宿られた」「言＝キリスト」が示してくれた、私たちを「神の子」としてくれる神の姿の核心があるように思われます。この「アッバ」と祈るイエスの肉声が弟子たちの記憶に刻まれ、パウロに伝えられます（ローマ8・15、ガラテヤ4・6）。新約聖書では「アッバ」はギリシア語の父「パテル」と訳され、日本語では「父」と訳されますが、「アッバ」と呼ぶ方が、イエスに倣って子としての信頼をもって親に向かう実感をもてるように思います。教皇フランシスコも「パパの腕に抱かれた子どものように祈るのです…「アッバ」とひとこと唱えるだけで、キリスト者の祈りは十分、深められます…キリスト者にとって、祈ることはただひたすら「アッバ」と唱えることです」（2019.1.16一般謁見演説「アッバ、父よ」）と説いています。さらに、アッバと関わる箇所として、イエスの苦しみの極みのなかでのゲッセマネの祈り「アッバ、父よ…わたしが願うことではなく、御心に適うことが行われますように」（マルコ14：36）の余白に、「＝南無アッバ」と書込んでいます。このイエスの祈りを凝縮したのが「南無アッバ」だと教えてくれた井上神父は、最晩年には体力も視力も極度に衰える苦しみのなかで「アッバ、アッバ、南無アッバ」と唱え続け、帰天されました。この祈りは72歳の井上神父がおみ風さまに委せて生きるなかでおのずとアッバから授かったという祈りで、リジューの聖テレーズの「幼子の霊性」とも通じ、様々に苦しむ人の日常を支える祈りとして伝えられましたが、上智大学の夏期神学講座でネメシュギ神父が「多くの祖先が全幅の信頼を置いて唱えたこの「南無（帰依する）」という言葉を、日本のキリスト者も自分の射祷として用いたらよい」と奨めた祈りでもありました（『キリスト教を生きる祈り』）。

私は、「南無アッバ」の祈りのうちに聖書に親しむことで、「ここも「南無アッバ」の祈りの姿だ」と実感される箇所に多く出合います。特に受胎告知を受けるマリア様の「お言葉どおり、この身になりますように」も、十字架のイエス様の最後の言葉「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」も、「南無アッバ」の究極の祈りの姿の模範として心に刻まれています。このようにみことばの実感を求めて聖書の学びによる書込みのある聖書を日々、読むことが、「アッバ、アッバ、南無アッバ」と唱える日常の祈りに支えられて生きる信仰の土台となっています。

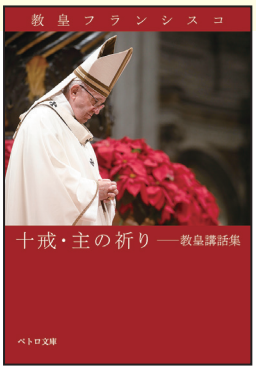
良書のすすめと読み方

新約の祈り（ペトロ文庫）
教皇ベネディクト十六世
2013年　カトリック中央協議会　　600円＋税



使徒言行録、パウロ書簡、ヨハネ黙示録などを通しての、祈りに関する前教皇の連続講話です。実に示唆的な教皇の視点を紹介します。使徒言行録 12 章には捕らえられたペトロが描かれています。教会はペトロのために「熱心な祈り」をささげていました。そのときのペトロの様子に教皇は注目します。「二本の鎖」につながれ、兵士に左右から挟まれた状態で、ペトロは「眠っていた」のです。教皇はこれに「神に信頼し、弟子たちの連帯と祈りに囲まれていることを知りながら、主のみ手に完全に身をゆだね」ている姿を読み取り、わたしたちの祈りもそのようでなければならないと説きます。肝要なのは、連帯と信頼です。神との対話のうちに、わたしたちは多くの兄弟姉妹ともつながることができるのです。

十戒・主の祈り――教皇講話集（ペトロ文庫）
教皇フランシスコ
2020年　カトリック中央協議会　　800円+税



十戒と主の祈りについて、身近なことから説かれる親しみやすい連続講話です。教皇は十戒の第一戒「わたしをおいてほかに神があってはならない」を通して、偶像崇拝の怖さを説きます。偶像とは何でしょうか。お金、物、容姿、名声、快楽……、わたしたちの日常を取り巻く、ありとあらゆるものが偶像となりえます。偶像に支配されるということは、その奴隷になるということです。そして、偶像は愛とは相いれないものです。それでもわたしたちは、何かをすぐ偶像に仕立ててしまいます。それは、最愛の人すら脇に追いやってしまう行為なのです。偶像は愛を見えなくするのです。教皇は力強く訴えかけています。「何が自分にとっての偶像でしょうか。それを引きはがして、窓から投げ捨ててください」。

使徒言行録・世をいやす――教皇講話集（ペトロ文庫）
教皇フランシスコ
2022年　カトリック中央協議会　　800円＋税

表題に挙がっているほかに「真福八端」を含む、三つの連続講話です。「使徒言行録」で教皇は、宣教する初代教会の姿を描いています。活動の筆頭は、もちろんペトロとパウロです。しかし、真の主役は別にあると教皇は説きます。「使徒言行録を読むと、教会の宣教の主人公は聖霊であることが分かります」。聖霊に己をゆだねるよう、つねに求められています。「世をいやす」は、コロナウイルスのパンデミック下に、傷ついた世界に対しわたしたちは何ができるのかを説いたカテケージスです。よくなって危機を抜け出す――、教皇は何度もそう訴えてきました。危機の前から「病んでいた」からです。しかし今、戦火は世界各地で一向に収まりません。さらに傷つく世に、わたしたちは何ができるのでしょうか。

◆編集後記◆
「言葉」はヘブライ語では「ダバール」です。そして、「ダバール」は「出来事」という意味も持っています。ユダヤの人々は、聖書に記された「言葉」はもとより、彼らが歴史の中で経験したさまざまな「出来事」をも、神のことばとして静かに聞き入ってきました。わたしたちも、日頃から聖書のことばに親しむのはもちろん、毎日の営みの中で体験する喜びや悲しみも神のことばとして受け止め、それを通して神は何をわたしたちに伝えようとしているのかに心を向けるようにしたいものです。

◆献金のお願い◆
この「聖書に親しむ」は無料で配布しておりますが、諸経費を含め聖書に関する活動のためにご寄付いただければ幸いでございます。その際は、下記へご送金くださいますようお願いいたします。

振込先：　郵便振替　00130-6-36546　（宗）カトリック中央協議会一般会計口